

四、貧女の一燈

それは釈尊が耆闍崛山にましました時のことである。ある日王舎城の阿闍世王は、世尊をおまねきして飯食を御供養した。釈尊がお帰りになった後、阿闍世王は祇婆大臣に相談した。

「今日は世尊を屈請して御食事を供養したのに、世尊は心よくお受け下さった。この上にも猶功徳を修するにはどうしたかよいであろうか。」

「それは、沢山な燈を捧げるにこしたことがございません。」

と答えたので、王は勅して百斛の油を用意させ、王宮の門から祇園精舎まで多くの燈をともして御供養することにした。

その頃、舎衛国に一人の貧しい老女があつた。仏のみ教を受けて信の深い豊かな心の人であつた。この貧女は、阿闍世王のことを聞いて、深い感銘を持った。しかし仏に供養しようと思つても、何ももの持つてはいなかつた。けれども彼女の心の願いは消すことが出来ない。

彼女は人に乞うて二錢を得たので、それを持つて油を売る店に行つた。そして油を求めると、

「お前は、大変貧しい人ではないか。この二錢で食物を買つて生きたかよいではないか。油を買つて何をするのだ。」

と店主がたずねた。すると貧女は、

「私は聞いたことがあります。仏の出世にお会いすることは難しい。百劫のうちに一度しか値えないと聞いております。しかるに私は有難くも仏の出世の時に生まれ合わせて頂きました。じつとしてはいられません。阿闍世王様は今日大変な功徳をお積みになります。貧しい私とても、せめて一燈でも献じて功徳がみたいものです。」

主人は貧女の尊い心に感激して二錢で二合のはずの油を、五合ほど与えた。

彼女はそれをもつて、一つの燈を供養した。けれどもこれだけの油では一夜はおろか半夜がおぼつかない。そこで貧女は、合掌して「もし私の心の願いが果たされて、後の世、仏と同じ覚が成就するならば、燈よ、一夜の間消えないでいてくれ。」と心から念ずるのであつた。

ところが、その夜になつて、王の捧げた数知れぬ燈は、風に消えたり油がなくなつたりするので、多くの人がそれについていても、完全にともつてはいなかつた。しかるに貧女の一燈は、消えないのみか、どの燈よりも昭々として輝きわたつた。遂に一夜中、五合の油がつきないで、翌朝までともつていた。

貧女は、翌朝再び来て、消えていないのを見るや、深く感謝して合掌した。

暁方になると、釈尊は、目蓮尊者に言いつけて、燈を消させられた。尊者は命を受けて、一燈づつ消して歩いた。しかし最後に残つた一燈。それを消そうとしたが消えなかつた。再度、三度消したが消えなかつた。袈裟であおいだが依然として消えない。光はいよいよ輝くばかりである。そこで神通力を出して大捲風を出して消そうとし

たが、徒勞であつた。一燈ますます光をまして、遂には天上の世界を照らし、更に三千世界を照らした。

その時、世尊は目蓮尊者をとどめて仰せられた。

「目蓮よ。やめよ。この貧女の一燈は、やがて仏になるべき功德、權威を持った光明である。この光の功德は汝の神力によつては消えない。

この貧女は宿世に百八十億の仏を供養して、仏になるべき決を与えられている。それから後、未だ布施を行わず暇がなかつたために貧しい生活はしているが、これから三十劫の間功德を積んだならば、仏の道は成就して、須彌燈光如来という仏になるのだ。この一燈こそ、その過去と未来とをつなぐ、尊い光である。」

貧女はこの説法を聞いて、大いに歡喜し、直ちに身は虚空に上り百八十丈の高さに至つて、大地に降り、仏を礼拝して去つた。

阿闍世王はこれを聞いて不審をいだいた。

「祇婆よ、私はかくの如く多くの燈を献じたのに、何故世尊は仏になることが出来るという決を与えては下さらないのであろうか。」

と問うた。すると祇婆は、

「大王の捧げられた燈は、数は多くても心が一心でなかつたのです。貧女は一燈でも、み仏を念ずる心が一心だったのでございます。」

以上は、世間でよく長者の万燈、貧女の一燈という有名な物語である。如何に大げさに見える事にでも、そこに一つのものが欠けているならば、真の力は持たない。2

しかし形の如何を問わず、真実の一心が流れている時、それに勝つ何ものもあり得ない。

富める人は、何時の時でも、真実に生きることが困難である。大きな仕事は、貧しい人によつてなされた。貧者の一燈こそ、やがて如来となる光であることを思う時、貧しいが故に、自らの生活を棄てることはおそるべきことである。